

## 東日本大震災 災害ボランティア活動レポート

清水ヒロシ

被災地を見ると共に災害ボランティア活動をしたいと言う思いが募り、社長にお願いしたところ快諾していただいた。6月16日（木）から23日（木）まで8日間、東日本大震災の被災地を訪れ、各地のボランティアセンターで活動しましたが、以下その日記風の記録です。

6月16日（木） 東京をたち石巻へ 曇り

午前10時前に、小型セダンの愛車に乗り、勇躍東北自動車道を一路北向けて出発した。那須高原を過ぎて福島県白河辺りから急に道路がデコボコし始め、路面補修が目立つようになった。「矢張り震災の影響は大きいな」、「前途多難」と気を引き締めた。しかし高速道路の痛みは郡山辺りまでで、その後は目立った痛みは少なく、仙台まで意外に快適なドライブとなった。また高速道路から見える周辺のビルや民家の被災の状況を観察したが、ブルーシートで覆われるような被害を受けた建物は意外に少なく、田植えが終わった田んぼが青々と広がり、外見上は震災前とほとんど変わらない平穏な風景が続いていた。

仙台に近づくとさすがに緊張感が出てきた。仙台南ICから仙台南部道路に入り、初日の目的地である石巻を目指す。仙台南部道路はいきなりあの名取川にぶつかり（河口から8km地点）それに沿って延びていた。そして河口に近づくと突然津波に襲われた風景が飛び込んできた。家屋が破壊され田んぼと思しき所が泥に埋まり自動車などの残骸が点在していた。若林JCから仙台東部道路に入るとその風景が海に沿った沿岸部に延々と続いていた。しかし反対に車の左側に見える風景は全く普通の仙台市の姿で、あまりのコントラストに津波が今回の災害の本質であることを悟った。車はそのまま三陸自動車道に進み、塩釜、松島の内陸部を通過して約55kmで石巻である。石巻市は津波による被害が大きかった人口16万人の大都市で、死者・行方不明者は約6千人とある。石巻市が近づくと自衛隊や災害復興支援と表示した車両が目立つようになり、緊張感がみなぎり、遠望を写真に撮り、そえそわした。石巻市内に入り、石巻ボランティアセンター（VC）がある石巻専修大学を目指し、午後4時頃に到着した。

石巻ボランティアセンター

石巻専修大学は市内山側の新興地域にあり、旧北上川沿いにあるが今回の津波の被害は全く受けていなかった。近くには自衛隊の宿泊基地や被災者用仮設住

宅が新設され、復興の拠点になる地域であった。VCは専修大学の5号館の一部を借りて事務局とし、広大なキャンパスの一角をボランティア向けテント村として解放している。また北上川土手沿いの周辺道路には駐車スペースが設けられ、そこでは車中泊が可能であった。テント村には色とりどりの大小100を超える多くのテントが張られ、各種のボランティア団体が活動していた。石巻VCはここで震災直後から活動を開始し、最も上手く運営されているVCのひとつだ。初心者や車のないものなどでも誰でもが参加できる体制が整えられているために、多くのボランティアが自然に集まるようになっていた。また国際色も豊かで、テント村には欧米人の若者が多数テントを張って活動していた。多くの人が生活しているのに、テント村や駐車場は実に清潔で、ゴミも全くなく、美しい環境が維持されていた。

VCで今夜の駐車エリアなどを確認し、午後4時半頃から残った時間で石巻の約50km北にある南三陸町を訪れる事にした。



### 南三陸町

国道45号は部分的に不通とのことで、地図を頼りに三陸道（無料開放中）を終点の登米（トメ）東和ICまで行き、国道398号を東に海に抜けるルートを選んだ。南三陸町志津川地区の山の谷間の部落に、津波の風景がいきなり出現した。線で引いたように見事に津波の到達地点があり、そこから下は残骸と完全な破壊の世界が区画されていた。車で数分下りやがて海が見え、そこには破壊された街や集落の跡が生々しく残っていた。どんガラだけ残った防災センターやスーパーマーケットなどテレビで何回も見たそれと全く同じ風景が広がっていた。これが今回最初に目にした、本格的な津波破壊の現場であり、強い衝撃を受けた。破壊された街より少し高い所には、志津川高校など変わらぬ姿

の建物や施設が残り、僅かの差で天国と地獄があった。海辺から国道を暫く進むと町の高台の地域には、立派なアリーナ（総合体育館）などの施設があり、臨時に公的機関が置かれ、その前にV Cが設置されていた。もう活動が終わった時間であったが、ここでも大勢のボランティアが活動する様子が窺え、心強い思いであった。真新しいコンビニも近くに開店しており、豊富な商品揃えを確認した。



興奮が冷めやらぬ内に、暗くなった石巻専修大学に戻り、夕食の弁当を食べて車中泊の準備。寝袋での野宿も考えたが、何となく気味が悪く、車中に何とか足を伸ばせるスペースを確保して、9時過ぎに横たわる。朝方には気温が15度C位まで下がり、冷として気持ちがよい気候だ。

6月17日（金） 石巻V C 曇り

女川町

この時期には午前3時半頃には夜が白み始め、車中泊だと自然に目が覚めた。折角来たのだから色々見て回りたい。4時前には出発して石巻市内を通り、女川町に向かうことにした。旧北上川を河口の方に向かうと、石巻の中心部から海側は被災地域であった。石巻市は全体に地盤沈下したとのことで（後で聞いた話では78cm）海拔ゼロメートルに近い地域が幾つかあり、国道が部分的に水没したり、住宅地域に水が溜まっている地域が散見された。沿岸部を走る国道398号沿いは、早朝でひと気はなく、破壊された街並みが延々と続いていた。

女川町はカキやホタテ養殖や観光と原子力発電所で有名である。女川町の中心部は、矢張り旅館・ホテルなどのビルの跡の残骸を残し、完全に破壊されていた。道路部分は残骸が撤去されていたが、その他の部分はまだ残骸が残り、鉄骨が歪んだままの姿をさらし、津波の破壊力の凄まじさを物語っていた。牡鹿半島などこの地域は1m以上の地盤沈下があったと



聞いたが、国道の一部が低地で冠水する

など、海拔ゼロメートルと思しき状況が窺えた。国道はその先の海岸の山腹を縫うように続くが、新緑と青い海の織りなす変わらぬ美しい風景が広がる中で、海沿いに点在する集落は、決まったように一定の高さ（凡そ20から30mであろうか）で破壊されつくしていた。道路わきの高台には、古い立派な記念碑が建っていた。昨日志津川でも同じようなものを見たが、昭和8年3月3日の津波の石碑で「大地震の後には津波がくる。地震があったら津波の用心。」と刻まれていた。今は運転を中止している女川原子力発電所にも近づきかかったが、道路が閉鎖され、女川の湾を挟んで対岸から様子を見た。静かに存在する建物群と送電用の高く白い鉄塔が遠望できただけであった。

### ボランティア初日

朝8時過ぎに石巻VC前に行き、受付を済ませる。やがてマッチングと呼ばれる依頼者とボランティアの組み合わせが始まった。初めての経験なので、要領が分からず暫く様子を見ていたが、受付を済ませて続々集まるボランティアがどんどん手を挙げて、幾つかの組み合わせが成立して行く。早くしないと仕事が無くなってしまわないかと心配になり始めたころ、スタッフの1人が慌てた様子で、「急に遠方からの依頼が入った。時間が掛かるが希望者はいないか。」と募集があった。手を挙げた所、4人で牡鹿半島の先端の鮎川浜の老人ホーム（デイケアセンター）の泥出し作業を行うことになった。鮎川浜までは道が細く、しかも途中の幾つかの集落は壊滅しているの、道路が難渋するかも知れないという。しかしリーダーは石巻出身で地理のよく分かったベテランの人になるとのことで、安心した。リーダーのTさんの車に乗り込み、半島のいくつもの破壊された集落を過ぎ、女川原発の裏側を通過、順調に1時間弱で現場に到着した。

我々の任務は地下に溜まった泥（ヘドロ状）の運び出しであった。地下の暗闇を投光機で照明し、中腰で泥の掻きだしをするかなりきつい作業であった。衣類、食器など生活用品、海藻、魚具など様々なごみの混じった泥を土嚢に詰め、外に運び出す。ヘルメット



を被り頭は保護されているが、何度もヘルメットを天井の棧にぶつけ、潮の匂いとも何とも付かぬ異臭が鼻を突く。5～6mも腹這いになりながら進み、地下奥に流された籠などの回収も行った。僕にとっては実にやりがいのある仕事であったが、リーダーのTさん（現在千葉にある化学会社に勤務し、有毒ガスに付いての知識あり）は、「硫黄のにおいがし、ボランティアを危険にさらす仕

事だ」と途中でクレームを付け、消防署が駆けつけてガス検査をする騒ぎになった。TさんのVCへの強い説得もあり、結局一区切り付いたところで作業は打ち切りとなった。素人のボランティアに何処まで踏み込んだ作業をさせるのかと言う、難しい問題にぶち当たったようだ。

同じ作業を担当したチームの他のメンバーは、秋田市から来た35歳位のサラリーマンと東京からの30前後と見られる無口な青年、それに現地で自炊・車中泊をしながらもう数日連続して活動している神奈川からの69歳の男性が加わった。またキリスト教系の宗教団体関係者と見られる欧米人が数名、ホームの清掃作業に参加した。子供たちに漫画絵本を贈る慰問活動をしているとのことであった。こんな辺鄙なところにまで多くのボランティアが訪れていることに、支援の輪の広がりを実感した。

### 石巻の被害



Tさんは、石巻の母を津波で亡くし、3月19日に葬儀を済ませ、それ以来何度もボランティアに来ているようだ。往復の道すがらその時の状況や地元の色々な情報を話してくれ、またVCに戻る途中には石巻市で最も被害の大きかった南浜地区を案内してくれた。市の中心部日和山の浜側に広がる南浜地区は、見渡す限り全滅していた（残念ながら写真を撮る気になれなかった）。もう瓦礫の撤去もほとんど終わり、街が跡形だけ残して消えてしまっていた。僅かに石巻市立病院のビルの残骸が聳えて建っているばかりであった。約6千人の犠牲者が出たことを実感させる風景がそこにあり、言葉を失った。隣接する日本製紙の工場もほぼ壊滅し、そしてその近くにTさんが育ちその母が無くなった場所があると言う。50歳前後と見られるJEFの熱心なサポーターが、その悲しい現実から目をそむけずに、毎週のように千葉からやってきて一介のボランティアとして地道な汗を流している。逆境に立ち向かう人の意地の強さの一面を見た思いであった。

6月18日（土） 石巻VC2日目 曇り

新北上川

朝4時に活動を開始し、被害の大きかった新北上川流域に出かけた。新北上川は豊富な水量を湛え、静かに悠然と流れていた。河口から10km付近で津波の痕跡を発見した。それから河口に向かうにつれ、堰堤が破壊された跡が連なり、川の周辺の田畑は、いまだに水浸しで至る所に自動車が放置されていた。

河口から4kmほどの地点に国道398号の大きな橋があるが、その橋が川の途中で半分を流失してちょん切れていた。

（右の写真はその遠望で、橋が左半分無くなっている。）その橋のすぐ近くに、多くの犠牲者を出した大川小学校がある。



まさか津波が4kmも遡って襲ってくるはずがないという油断があったのだろうか。逃げ遅れた多くの生徒と教師が犠牲になった所だ。実に悲しい。

その現場から更に海辺の町雄勝町方面に足を伸ばした。雄勝町は、お決まりのように壊滅していた。さらに半島の山道を奥に走ったが、静かで美しい海岸線が続き、人工の小さな漁村が潰れている。自然の報復のような皮肉さえ感じた。

ボランティア2日目

2日目のボランティアの仕事は、市内中心部に住むHさんからの依頼である「庭のヘドロ出し・清掃作業」と決まった。6人でチームを組み、僕がリーダーを務めることになった。リーダーの主要な仕事は、①持参する資材の確認・受け渡し、②依頼者との連絡（依頼内容の確認など）、③仕事分担の決定、④休息など安全・健康への気配り、⑤作業終了時の撤収・資材返却、⑥VCへの活動報告である。Hさん宅は津波の被害が比較的軽かった地域にあるが、床上1mほどの高さまで津波が襲ったようで、木造平屋建ての母屋は、構造や瓦葺の屋根はしっかりしているものの中は家具が破壊され、ヘドロがこびりつき、至る所泥だらけで住めるようになるかどうか見当もつかない荒れようであった。Hさんは母屋の取り壊しを漸く決めたとのことであった。国道398号に面した千坪を超える大きな敷地内の国道側は事業用地で（アップルの買い取り店と駐車場）裏側に住宅と庭がある。敷地内のがれきはすっかり撤去されてきれいになっていたが、まだヘドロやゴミが溜まっているので、それを土嚢に詰めて撤去しきれいにする作業であった。現地での作業は9時半ごろから開始し、途中休憩を何度かしながら2時半ごろまで行い、まとめよく作業し順調に終了した。

メンバーは、別府から参加している50歳がらみのご夫婦、横浜からの66歳の男性、2人連れの40歳がらみの東京都庁職員であった。横浜の男性は、リタイア後で時間もあり車中泊でもう2週間近く活動しているとのこと。都庁職員の2人は金曜夜に東京を発ち、早朝に到着したばかりで、作業終了後に帰京する強行軍とのこと。別府のご夫婦は、軽トラックで来て寝泊まりし、無期限で活動しているとのこと。石巻港の浜で終夜焚火を焚いて、鎮魂の祈りを叫び続けたと言う熱い夫婦で、リサイクル業をほったらかして駆けつけたと語っていた。

活動終了後に、石巻市内の被災地域を再び見て回り、心に刻んで石巻を後にした。東北道を仙台経由で一関に向かった。道路は一関付近でややデコボコが激しく、地震の影響が窺えた。今日は車中泊から解放され、一関市内のホテルに泊まる。

6月19日（日） 陸前高田VC 晴天

陸前高田

早朝5時に陸前高田市に向かって出発した。気仙沼経由のルートは国道45号が部分通行止めになっていたため、千厩（せんまや）から北に大きく迂回するルートとなった。

陸前高田市は震災前の人口が約2万5千人で、犠牲者数は警察集計で1,508人（5月末）、VCでは約2千人と言っていたので、人口の8%に上る。人的被害が最も大きかった都市である。市の中心部は、海に開け周辺の山に囲まれた比較的広い扇形をし、その西側を気仙川が流れている。その扇形をした市街地の奥の方まで津波に襲われ全滅した。また湾内左右の沿岸部に広がる民家や田畑が飲み込まれた。市街地では既によくのがれきが撤去され、見渡す限りの廃墟になり、主要道路だけが妙にきれいにその中を貫いて通っていた。瓦礫の山の先の気仙川の河口には、有名になった一本松が残り、遠くからも確認することができた。他の地域と同じように、周辺の山にある施設、家や寺院などは平穏なたたずまいを残していた。



## 大船渡市

まだ時間があつたので、北に隣接する大船渡市にも足を伸ばした。陸前高田市から三陸自動車道のトンネルを抜けると直ぐのところにあつた。大船渡市は人口4万5千人の漁港である。大船渡湾の奥深くにあり、湾には碁石海岸などの観光地もある風光明媚なリアス式海岸が連なっている。大船渡市中心部の臨海部は、漁港に沿って漁業関係の施設が並び対岸には太平洋セメント工場などがあるが、それらは全てお決まりのように壊滅していた。また陸に流された漁船が民家に絡んで放置されている姿も残されていた。しかし、比較的平地が少ないことと、湾の奥深くで津波が分散されたのであろうか、被害地域が比較的低位に限定されていたように見受けられた。陸前高田市でのショックがあり、それとの比較でそのように見てしまうのかも知れない。



## ボランティア3日目

陸前高田V Cは、市街地から気仙川上流に約7 km離れた辺鄙な国道脇にあつた。車でないとアクセスできない不便な場所ではあるが、多くのボランティアが集まり、河川敷の駐車場は満杯であつた。V Cの運営は確立され、十分に機能しているように見受けられた。マッチングの結果、市街地からかなり離れた広田部落にある農家から依頼された「畔道のがれき撤去作業」を行うことになった。8名のチーム編成で、車6台を連ねて出発し約20分で現場に到着した。広田部落は海沿いの小さな集落で、農業が点在しているようであつたが、殆ど壊滅しており、どの程度の大きさの集落であつたかは分からなかつた。両側を海に挟まれているため、今回の津波では両側からの津波に襲われたようで、比較的高台にあり残った依頼者Eさん達の住宅も、大きな被害を受けていた。Eさん宅の前の田んぼの畔道には、壊れた住宅の残骸などがれきと泥が混在し、無残な状況であつた。クギ、ガラスを含む大小のがれきを片付け、泥や衣類、書類、食器片など細かいゴミも収集した。中には流れてきた息子の名前が書かれた写

真アルバムや首飾りを発見し、VCに提出した。Eさん宅は立派な瓦屋根の広い住宅で、震災前の暮らしぶりの豊かさが窺えたが、周辺の2～3戸の住宅も同じようであった。晴天下の重労働であり、瓦礫の移動と共に粉塵が舞う不健康な作業であったが、午後3時ごろまでに予定通り終了することができた。

ボランティアのメンバーは、岩手県奥州市から来た30歳台と思しき3人組の青年、同水沢市の自動車部品工場で働く20台女性、秋田市の30歳台の印刷機械営業マン、胆沢ダムで働く30歳台ボーリング技師、それに大阪豊中市の40歳頃の市議員であった。石巻と比較すると岩手県内者の比率が高くなり、県外のボランティアは少ないように思えた。奥州市の3人は、リサイクル用品をインターネット経由で全国から集めて被災地に配る活動を、既に奥州市を拠点に手広くやっているようで、岩手県内被災地をこまめに訪問しているとのことであった。水沢市の女性は、ゴールデンウィーク後、毎週末に来て活動しているそうである。秋田の男性と胆沢ダムの男性は初めての経験とのこと。異色は豊中市議で、昼食時や休憩時間に行政やボランティア活動に付いて様々な議論をしたが、帰り際に自分は市議員であることを明かして、「勉強のために来た」と語っていた。地方自治体政治家にとっても、災害対策やボランティア活動支援などは、身近なテーマになって来ているようで、現場での経験から学ぶ姿勢が必要なのであろう。

6月20日（月） 気仙沼VC 晴天

ボランティア4日目

気仙沼に向けて一関を出発したのは、午前7時頃。今日は少し寝過ぎた。8時過ぎにJR気仙沼駅に比較的近い高台の老人ホームにある気仙沼VCに着いて、作業着に着かえ、急ぎ登録を行った。気仙沼の被災地域はまだ見ていず、若干の不安がある。マッチングが始まり、材木の高速洗浄機での清掃作業補助などに続いて、「船2艘の移動とがれき撤去」の募集があった。募集人員は15名であったが、気仙沼らしい面白い作業と言うことで希望者が殺到した。結局僕を含めて16名が決まり、やや難しい作業と言うことで、リーダーは尼崎から来ているベテラン消防団員のMさんと決まった。Mさんはさすがにテキパキし、船舶の移動のための必要資材は何かと適格な指示を出して、大型バール数本やロープなども持ち、準備が完了した。VCのマイクロバスに乗り込み、勇躍依頼主のOさん宅に向かった。Oさん宅は、火災の激しかった鹿折（ししおり）地区の先の大浦にあり、15分程度で到着した。

移動する船は小型船舶で浜から約100mほど流されてがれき



溜まりの中に沈んでいた。船を反

して方向を定めて、舳先にロープを取り付ける。下にはコロを等間隔に敷いて準備完了。掛け声と共にロープを引き、後から押す。船は順調にコロの上を滑り、動いた。その作業の繰り返しで、道路を横断して浜の所定位置まで移動を完了した。船を引くもの、押すもの、コロを運び敷くもの。ボランティア全員の力とチームワークによって、大きなトラブルなく作業を遂行できた。その後は、Oさんの敷地内の半分焼けながら崩れた家屋などのがれき撤去、流された衣類などの回収、また電動ノコでの植木の伐採、清掃などを行い、無事に午後3時ごろには予定作業を終了した。

Oさんは漁業を営み、道路を挟んで海側に住宅と漁業用岸壁を、山側の高台に母屋を持っていた。海側の建物は壊滅して様子は分からなかったが、二階建て母屋の方は1階はかなり被害を受けたものの概ね無事であった。

(右の写真Oさんの壊れた岸壁から鹿折地区を遠望)



漁師は立派な家を造ると言うが、Oさん宅はその典型で、母屋は立派な屋根瓦の頑丈な作りの豪邸で、座敷や床の間には50cm以上の紅葉の一木柱をふんだんに使い、天井までの高さの神社を思わせる神棚を供えていた。災害前の豊かな暮らしぶりが窺えた。震災時には、津波から逃げおおせたその後の火災によって谷間に追い詰められて、煙にまかれて呼吸ができなくなり、一緒に逃げた家族や仲間が覚悟を決めたそうである。所有する岸壁を使い、ローンで船を購入して、早期に漁業を再開したいと意欲を語っていた。

チームには様々な人が参加していたが、遠方の九州から3名(熊本、福岡、佐賀)が車で来ていたのが印象的であった。また横浜の若い理容師が4名連れて参加していた。4名の内2名は、作業中に釘を踏み抜いていた。知らないまま作業を終えて、VCで作業用長靴から安全ソールを抜いたとたんに釘が足に達して軽い怪我を負った。幸いことなきを得たが、不注意を戒める教訓であった。リーダーのMさんは60歳半ばと見られ、消防団の制服を着たその姿は、国のために身を捧げた旧日本兵の風貌である。演歌を愛して歌手活動もし(芸名「尼崎市郎」とのこと)、3週間の予定で車中泊をしながら慰問も含めたボランティア活動を継続しているそうだ。バンタイプの車の後部には、自家発電機、チェーンソー、高圧洗浄機、スコップなど各種の復興作業用資材を満載しており、その心意気には感服した。

## 気仙沼市

作業終了後に破壊された市街地をつぶさに見て回ったが、気仙沼は陸前高田に比べるとまだがれき撤去があまり進んでいず、市街地の至る所に建物の残骸やがれき、船舶がまだ放置されていた。気仙沼市は人口8万人弱で、犠牲者数は1,467人とされている。平地が少ない地形であるために、被害にあった地域が限定されたため、人口の割に犠牲者が少なかったと見られる。市役所やJR気仙沼駅など海岸から少し離れた市街地の一部は被害に会わずに残り、高台の国道に沿った住宅地域も無事であった。気仙沼の悲惨だったことは、地震・津波によって引き起こされた石油タンクの破損と広範囲で起こった火災であった。前記の鹿折地区では油が海に流れ、広範囲で海が燃えたために火災が広がったそうである。また水産加工場の被災により、魚の腐った異臭が広がった。気仙沼近郊では風向きによればその異臭がして、確かに気になった。

気仙沼は、東北随一の遠洋漁業の基地である。漁港や周辺の水産加工関連の工場・施設は大きな被害を受けた。しかし、漁業市場の埠頭と鉄筋造り建屋は残り、復旧が進んで、6月23日から水揚げを再開するそうである。片付けが終わった埠頭に立ち、恐らく元に戻ることはないであろうが、漁港機能の再開が復旧・復興を後押しすることは間違いないと思った。



6月21日（火） 気仙沼VC 曇り  
ボランティア5日目

ボランティア5日目の作業は、市内の民家の「風呂場を中心にした清掃作業」であった。5人チームで、VCから10分程のところにある依頼者Tさん宅に向かった。Tさん宅は市内中心部を流れる大川沿いであり、津波遡上の到達点に近い住宅地にあった。木造瓦葺二階建てで、東京と比較すると敷地も広く、立派な民家であるが、この辺りでは標準的な住宅なのであろう。1階の軒下まで津波が来て1階の壁や家財は流されたが、建物と瓦屋根はほぼ無傷で残り、避難所生活続けるKさんは、何とかこの自宅を復旧して2階で住むようにしたいと願っていた。1階にある風呂場はユニットバスでほぼ残ったが、泥と津波に含まれていた石油タンクの油でベタベタになっていた。Tさんは戻った時に何

とか風呂場を使えるようにしたいと、清掃を依頼したようである。泥出しをした後、天井までこびりついた油などを取る作業などを分担して行った。残ったメンバーは居室などの剥いだ床下や室内の清掃を行った。

5人のメンバーは、佐賀県から来た造園業を営む50歳台の男性、千葉県柏市から来た50歳程度の医療機械の営業マン、東京から来た30歳台のビル清掃会社社員、東京から来た20歳代のゼネコン社員であった。若いゼネコン社員は、ODA関連プロジェクトに携わっているのもので日本のことをやりたくて仲間と石巻で活動し、その帰りに1人で気仙沼に来たとのこと。清掃作業途中で床材から突き出た釘に足を引っ掛けて怪我をし、一時VCに戻って治療するアクシデントがあったが、幸い怪我の程度が軽く（破傷風の予防注射を接種済みとのこと）、1時間程度で作業に復帰することができた。医療機械の営業マンは、気仙沼市民病院で孤軍奮闘する医師と仕事での旧知の間柄とのことで、その医師を訪問がてら参加したとのこと。ビル清掃会社社員は、ハウスクリーニングの経験もあるとのことで、風呂場の清掃には打ってつけで、彼に仕上げ作業をお願いすることによって、見違えるように綺麗に仕上げることができた。心配された雨も降ることなく、気持ちよく汗をかき、予定通り3時前に作業を終えることができた。

作業終了後、VCに帰還すると同時に激しい夕立が降り始めた。何かを洗い流してくれるのだろうかと思われながら後ろ髪を引かれる思いの中で気仙沼を後にし、一関經由仙台に向かった。仙台市内のビジネスホテルに移り、宿泊した。



6月22日（水） 宮城県亘理町VC 晴天

亘理町

亘理町は仙台市の南約20kmにある、イチゴ栽培が有名な農業と漁業の町である。人口は約3万5千人余、今回の震災の犠牲者数は262人と発表されている。仙台市から仙台東部道路を南に下り、仙台市若林区（荒浜での大量遺体発

見で有名)、仙台空港のある名取市、岩沼市の先にあり、阿武隈川の河口域に位置している。広い町域の沿岸部に当たる約半分が津波の被害にあった。特に漁港(荒浜港)のある荒浜地区は被害の大きかった地域で、多くの漁業関係施設や住宅などが破壊された。

破壊の程度はそう変わるものではないだろうが、都市部の破壊を散々見てきた目には、被害がまだ軽くて良かったという風に見えた。初日に、若林区の遠望を見てショックを感じたことを思うと皮肉なものである。

#### ボランティア6日目

亘理町のVCは、中心部の公民館に隣接する武道館の中に設けられ、想像していたより充実し、多くのボランティアが訪れていた。張り出されたグラフでは、平日でも200人弱の活動があるようだ。

マッチングの結果、思いがけなく仮設住宅住民への「ニーズ聞き取り戸別訪問」が割り当てられた。住宅の泥出し作業を希望したところ、車出しができるメンバーが必要とVCから戸別訪問への変更を依頼されたものだ。亘理町では仮設住宅の建設が進んでいるようで、その一つとしてJR駅の近くの敷地に、約600戸の仮設住宅の建設が終わり、入居が進んでいる。その入居者に社会福祉協議会の広報誌と支援物資を配給しつつ、個別のニーズをヒアリングして欲しいというものだ。

8名のチームで作業に入ったが、僕を除く全員がご婦人であった。2名は地元社会福祉協議会のスタッフ(地元ボランティアや近隣社協からの派遣)、6名のボランティアの内5名は地元亘理町や隣町の住民であった。他の1名は東京から来てたが、NPO法人からの輪番派遣とのこと。地元住民は、多くの人が何らかの形でボランティア活動に参加しているそうである。2名1組で、4組を作って分担した。

約150戸を回ったが、平日の日中の訪問であるため不在住宅も多く、またまだ未入居の住宅もあったため、ヒット率は30%に満たない印象であった。高齢者が多かったが、仮設住宅に特に不満なく、満足していると答えた入居者が多数であった。しかし、中には「夫婦2人で申し込んだところ、1DKの住宅が割り当てられ、荷物を入れたら居場所がなくなり、食事テーブルを置く場もない。」或いは「家族6名いるが、2間しかない。」と狭さを訴える声があった。仮設住宅への入居に当たっては、布団セット、冷蔵庫、洗濯機、クーラーなど一式が支給されて、基本的な生活は保障されているようだ。また食料など支援物資も豊富に支給され、有難いとの声が多かった。住宅環境も、見たところ、周囲のバラスの入った道路は砂ほこりが立たないように舗装が進んでいるし、足の不自由な高齢者のために出入り口にスロープを付ける追加工事が、入居者

要請に従って多くで終了していた。スペースの問題もあろうし、被災者の実態に応じて個別に事情が異なるのは容易に想像できる。しかし、最低限の生活を保障するという行政の理念からすれば、行政や各種支援によりかなり手厚い支援が行われていることを実感した。

ちなみに、物資の支援のほかに、亘理町から、犠牲者の家族には250万円から500万円の弔慰金が、また被災者には2万円から3万円の緊急生活支援金が支払われている。また日本財団などから、各種の資金支援が実施されているとのことであった。

最後の仕事は、これまでとは異質のものであったが、現在の被災者の生活実態や支援がどのように被災者に伝わっているのか、その一端を勉強する貴重な機会となった。



#### 6月23日（木） 東京への帰路

今日は、仙台は朝から雨である。東北地方に本格的な梅雨入りが宣言されたようだ。昨日までの活動期間には、幸い雨がなく、順調に予定通りに活動できたことに感謝の気持ちが一杯だ。今日は各地のボランティア活動も、中止になっているところが多いだろう。被災地に雨が降ると、復旧作業が遅れるのみならず、低地や地盤沈下した地域には、水没・冠水するところも多く出てこよう。また大雨により地盤の弱い所の災害の懸念もあろう。心配すれば切りがないが、これ以上の自然災害が降りかからぬように祈るしかない。

思えば多くを学ばせて頂いた1週間であった。熱い心の全国から集まったボランティアにも会った。あまりに一日一日の密度が濃くて、昨日のことがもっと時間が経った昔のことのようと思われる。正直、詰め込みすぎて少し疲れた。色々な思いを胸に、「災害支援」の標識を付け重機を乗せた自衛隊の車列などと共に、東北道を東京に向けて一路南下した。

## 【追記】

この記録は、ボランティアを志す人の何らかの参考になればと言う気持ちも込めて作成した。

ボランティア参加を思い立ち旅程を組み始めたところ、岩手の被災地のボランティアセンターでは車中やテント泊などをしないように呼びかけていることを知った。岩手県のボランティア活動に参加するためには、事前に自分で宿泊施設を確保する必要がある。出発の3週間ほど前になる5月末に陸前高田市や気仙沼市への基地になる一関周辺のホテル、旅館、民宿などに当たって予約を試みたが、復旧・復興作業のために全て抑えられているとの事であった。ちなみに地元の観光センターに問い合わせしてみたところ、復旧作業以外にも急な葬儀などが多く地元の顧客を優先しているので予約は難しいだろうと解説してくれた。宿泊施設の確保が難しいようであれば、個人での行動はあきらめてNPOが募集する団体活動に参加するしかないかと諦めかけていたところ、一関出身の友人が、地元のビジネスホテルの社長に直接話を通してくれて、一関での宿泊を確保することができた。これで被災各地を自力で回る活動スケジュールを固めることができ、勇躍旅立つこととなった。(現地に行ってみたところ、陸前高田でもやや遠隔地であるがボランティア用に宿泊施設が確保されており、事情は大分改善されていることが確認できた。)

以下、参考までに・・・・。

1、各地のVCでは、資器材はかなり充実し、不足するものはなかった。個人用のマスク、手袋や安全ソールなども必要な人には豊富にあった(尤も準備してくる人が大部分)。またスポーツドリンクや駄菓子などもかなりあり、亘理町では作業が終了したボランティアにカレーライスの振る舞いまであった。見たところ物資は豊富と言えよう。

問題は常駐の運営スタッフだと思う。VCの運営にはニーズの掘り起こしと、適切なマッチング、それに宣伝広報が欠かせない。それらを十分に実施できる慣れたスタッフの養成には、時間が掛ろう。スタッフには若者が多かったが、時間に余裕のある年配のボランティアの積極的な関与があっても良いだろう。

2、復興は被災地の大きな課題である。地元の関係者は、なんとか早く復興して「元の賑わいを取り戻したい」と願っていると思う。無責任な言い方かもしれないが、現場を見た率直な感想は、元の賑わいを取り戻すのはかなり難しい。被災地に戻りたい人もいれば、戻りたくない人もいるだろう。地盤沈下した地域は、震災前より条件は悪化しているし、地域の安全を完全に確保する方法はないだろう。漁港や養殖地を中心とした水産業の復興が被災地の多くのカギを握るが、水産業にも構造改革が必要であり、元に戻すことが必ずしも良いこと

ではなく、否が応でも近代化や国際競争力を考慮した新しいやり方の模索が必要と思われる。住宅の問題は、産業の問題に付随して考慮されるべき問題であり、仕事や職場が確保されないところに生活は無いだろう。地方の疲弊や若者の流出などの問題を抱えている。人口の流出を食い止めるには、新しい産業など地方の魅力を作り出す、新しい知恵が必要とされていると感じた。

### 3、活動した被災地の基礎データ

陸前高田市 総人口24,246、死亡者（警察発表）1,508 死亡率6.2%

気仙沼市 総人口78,011（平成17年国勢調査）、死者・不明者1,467

石巻市 総人口163,216（平成22年9月末） 死者・不明者5,865

亘理町 人口35,663（平成21年12月末） 死者・不明者262